

# 久保田巧 & パウル・グルダ デュオリサイタル

## 1部

ヴァイオリンとピアノのためのソナタ へ長調 K.377  
.....モーツアルト

組曲 Op.11.....ゴルトマルク 美しきロスマリン.....クライスター

## 2部

ヴァイオリンとピアノのためのソナタ 第1番 ト長調  
「雨の歌」Op.78.....ブルームス

ウィーン奇想曲.....クライスター

愛の喜び.....クライスター

秋

## 四季コンサート 2008 25周年記念

2008年10月9日(木) 6:45PM

会場: 浜松市教育文化会館

主催: 浜松音楽友の会

### プロフィール

#### 久保田 巧 (ヴァイオリン)

東京生まれ。桐朋女子高等学校音楽科を経て、ウィーン・フィルの名コンサートマスター、ヴォルフガング・シュナイダー・ハン氏に師事。1983年第2回フリツ・クライスター国際コンクール第2位、第3回ミケランジェロ・アバト国際音楽コンクール第1位、そして1984年1位を出さないことで有名な、ミュンヘン国際音楽コンクール・ヴァイオリン部門で日本人として初めて優勝。以来、サヴァリッシュ、ベルクマン、ギーレン、チュクナヴァリアン等の指揮するミュンヘン・フィル、バイエルン国立歌劇場管弦楽団らと共に、ヴィンシャーマン&トイ・バッハ、ゾリステンの演奏旅行のソリスト等を務める。1988年、ウィーン・ピアノ四重奏団を結成し、室内楽にも力を入れている。1987年よりサイトウ・キネン・オーケストラにまた1990年より水戸室内管弦楽団にも参加。コンサートミス・トレースを務めるなど、中心メンバーとして活躍している。1998年よりピアニストのヴァディム・サハロフとリサイタル・ツアーワーを行なう各地で好評を得る。2003年プロコフィエフ没後50周年を記念して録音したソナタ集は、陰影の濃い、スケールの大きな演奏でその力量を高く評価された。その他CDも多数多く、2004年に発売した「バッハ:無伴奏バルティータ全曲」(エクストン)は、レコード芸術で特選盤に選ばれ名盤として高い評価を得ている。最近では、新しいパートナーとしてピアニストのパウル・グルダと共に演る。2008年秋には「ブルームス:ヴァイオリン・ソナタ全集」をオクタヴィア・レコードよりリリースする。

#### パウル・グルダ (ピアノ)

1961年、ウィーンに生まれる。8歳よりピアノの学習を始める。パウルによれば、最初の先生はジャズ・ピアニストの、フリツ・パウラー、ローランド・バティックであり、父、フリードリヒ・グルダによって、音楽への方向性が決定付けられた。また、偉大なハインリヒ・ノイハウスのアシスタントを長く務めたレオニード・ブルムベルクからは、ロシア学派の基礎を学んだ。そしてルドルフ・ゼルキンが音楽における真髄を教えるとともに、彼を支持してくれた。これらの経験をもとに努力を重ね、独自の芸術性を確立し、今日の活躍に至っている。1982年より、パウル・グルダは国際的なソリスト、室内楽奏者、作曲家として活躍している。また、音楽と文学を組み合わせたプログラムの企画者、共同プロデューサーとしても活躍している。1998年からは各国で定期的なマスタークラスを開き、2001~2003年にはウィーン音楽大学の客員教授を務めた。ハーゲン弦楽四重奏団とのブルームス「ピアノ五重奏曲」(DG)をはじめ、ソロ、室内楽等で優れた録音を残している。



久保田 巧 (Vn)  
パウル・グルダ (P)  
デュオ・リサイタル

TAKUMI KUBOTA  
PAUL GULDA  
DUO RECITAL

●モーツアルト(1756~1791)／ヴァイオリンとピアノのためのソナタ へ長調 K.377  
モーツアルトにとって、一番身近な存在であった楽器はヴァイオリンとクラヴィーア(ピアノ)である。ゆえにこの組み合わせであるヴァイオリンソナタという形式をモーツアルトは好み、生涯にわたって創作に取り組んだ。40曲近くにも及ぶヴァイオリンソナタは初期、中期、後期でヴァイオリンとピアノのバランスが異なるものの、限りなく美しく甘美な旋律線、デリケートな陰影を含んだ流麗さ、ときに痛快に疾走する爽やかさ、そしてふと振り返るような佇まいと、モーツアルトが独自に有する類稀な感性を綴った重複の作品群である。このソナタは、1781年の夏にウィーンで作曲された。この頃のウィーンは、啓蒙專制君主として知られるヨーゼフ二世の積極的な政策で、ヨーロッパで最も進歩的な都市に変貌していた。モーツアルトが定住を決意したのもそんな自由な雰囲気に憧れたからで、この作品には輝かしい希望が込められている。

第1楽章 アレグロ へ長調 2分の2拍子 ソナタ形式

第2楽章 アンダンテ 二短調 4分の2拍子

第3楽章 テンポ・ディ・メヌエット へ長調 4分の3拍子

●ゴルトマルク(1880~1915)／組曲 Op.11

カール・ゴルトマルクは、ハンガリーに生まれたユダヤ系の作曲家である。エーデンブルクやウィーンの音楽学校で学びはしたが、ヴァイオリン、ピアノ、作曲についてはほとんど独学で会得したと伝えられている。オペラ、交響曲、演奏会用序曲、協奏曲、合唱曲、ピアノ曲などを書いたが、もっとも知られている歌劇「シバの女王」やヴァイオリン協奏曲第1番、交響曲第1番などを除き、現在演奏される機会は多くない。ヴァイオリンとピアノのための組曲は、1893年に書かれた「Op.43変ホ長調」とこの作品の2曲が残されており、1869年にマイツで書かれたこのニ長調は、目くるめく色彩感と強烈な旋律のパッセージが鮮烈な響きを織り上げる。

「序曲」、「バッハ風」、「メヌエットの代わりの優しいワルツ」、「現代的な」、「軽快なフィナーレ」。

●ブラームス(1833~1897)／ヴァイオリンとピアノのためのソナタ 第1番 ト長調 「雨の歌」Op.78

ブラームスのヴァイオリンとピアノのための作品には、ソナタが3曲と、シューマンとブラームス、そしてブラームスの友人であった音楽家アルバート・ディートリッヒの3人が各楽章を担当して書き上げた青年時代の「F.A.E.のスケルツォ」と呼ばれる楽曲がある。ブラームスの弟子たちによると、他にも3、4曲を書いたようだが、自らの作品に対して厳格過ぎる性格のため、破棄されてしまったという。この「第1番」にしても、1879年によく完成し、出版されたのはブラームスが40歳を超えてからであった。3曲という数は、モーツアルトやベートーヴェンに比べて至って少ないが、その内容は極めて濃密でかつ深い精神性に彩られており、フランクのソナタとともに19世紀最高のヴァイオリンソナタとして親しまれている。第3楽章冒頭の旋律が、ブラームス自身が過去に作曲した歌曲「雨の歌」に由来するため、このソナタは「雨の歌」と呼ばれている。

第1楽章 ヴィヴァーチェ・マ・ノン・トロッポト長調 4分の6拍子 ソナタ形式

第2楽章 アダージョ 変ホ長調 4分の2拍子 三部形式

第3楽章 アレグロ・モルト・モデラートト短調 4分の4拍子

●クライスラー(1875~1962)／ウィーン奇想曲

フリツ・クライスラーは、20世紀を代表する大ヴァイオリニストであり、また作曲家でもある。ウィーンで生まれたクライスラーは、ウィーン音楽院とパリ音楽院に学び、ヨーロッパやアメリカを演奏旅行して国際的な名声を得た。その演奏は上質な気品と香り高いロマンに満ち溢れ、他のヴァイオリニストとは一線を画す表現力を持っていた。

今日も広く親しまれているヴァイオリンの小品を数多く作曲しているが、当初は自作ではなく、昔の大家の編曲作品としてクライスラーは発表したのである。これらは1810年に「古典的手稿(全18曲)」として出版されたが、作曲から四半世紀を経た頃、すべてクライスラーの自作だったことを公表、世界を驚かせた。他にも同じ年に出版された「オリジナル作品集(全13曲)」や他作曲家の編曲集「ヴァイオリンの傑作(全18曲)」、「編曲集(全28曲)」などを残している。この作品は、「オリジナル作品集」の第2曲。ウィーン情緒が濃厚で、ゆったりとしたワルツや華やかで急速なワルツなど、変化と郷愁に満ちた表情が多彩に現れる。大まかな三部形式を採っている。

●クライスラー／美しきロスマリン

ロスマリンとはローズマリーのこと、日本では「万年蠅(まんねんろう)」という。オーストリアなどでは、可憐な少女や愛する人、一番大切な宝物を指す。やはり懷古的なウィーン風のワルツで、「古典的手稿」に含まれる。クライスラーらしい甘美な旋律が印象的である。

●クライスラー／愛の喜び

「古典的手稿」の第10曲。ウィーンの古い舞踏歌を模しており、快活なワルツから中間部は哀愁を帯び、最後には喜びに沸き立つようなワルツで曲を閉じる。